へえ、さすが余裕やなあ

「教室まで案内してあげてください。」と、眼鏡の先生は言った。
僕はその指導員に連れられ、教室の方へ向かった。
お父ちゃんが、僕の方を心配そうに見ていた。
僕は、お父ちゃんに向かって、ニコッとした。

そうだ、試験を受けるのは本人だ。

兄貴は、横で「今日は最後の余裕」
という感じで、窓の流れる景色を見ている。
いつもは、必死に、赤本や、
チャートの本を開けていたのに。

窓に広く、三条河原がせまって来た時、
「三条大橋か」と、兄貴の口から、
一言かすかに聞こえた。
見ると、橋桁の丸太が太くて
どっしりしている感じがした。

兄貴とは、三条京阪で別れた。

僕は、兄貴には、頑張れもなにも言わず、
ただ、じっと兄貴の顔の表情を見ていた。
兄貴が　ニッコとして、手をあげた。
僕も、ニッコとして、うなずいた。

学校では、中学校入試の面接で、
細かいちびさんがいっぱい講堂にいた。
きっと昼間で、今日は切り下がるかなと思ったが、
残念ながら、HRが消えただけで、

Candy
in the Heart
290

萩原良昭